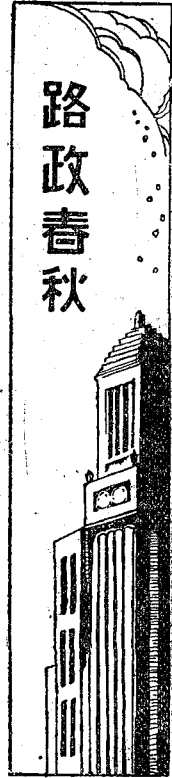


路政春秋



全線アスファルト坦々たる舗装道路は何處に

鐵道と不即不離の併行線となつて走る！道は時々鐵道線路の右になつたり左になつたり、ゆるいカーブを描いて屈折したりする以外は四キロも五キロも殆んど直線コースで農民の往來さへなければ時速百キロから百二十キロ走るとは實に容易で全線アスファルトで舗装された快適な明朗な道路は何處にか武器も軍需品も封鎖は何かとばかり輸送さるゝは此道路で佛領印度支那ハノイと廣西省とを結付けて居る路線である、道路の良否は國の興亡を制する

路政春秋

の力がある。再建ドイツの新装はヨーロッパ國民の眼をそばだてしめて居る自動車専用道路である、視よ其の道路を、所謂ヒットラー道路は十六フィート半幅の草地又は灌木地帯を境界として、その兩側に各々二十四フィート半の道路を造り、更に自動車の停留場として兩側の道側隨處に六フィート半幅の餘地を置く。即ち道路の全幅員は七十八フィート半の大道路で、單に片側の道路のみを以てしても自動車三臺の並走を容し得るであらう。しかも最も構造の妙を盡して居るのは、一般道路との連絡で、左右上下に曲線を放出して自由に出入を便し絶対に平面交叉を避けてゐる。

注 意

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に渡らざる限奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

ドイツ國民の精神的指導問題を解決する意味に於てヒットラー道路の計畫と爲つて居ると謂はるゝのも故なきことでない道路を開却して國運の發展を何に求めらるべきか。

軒下道路も亦妙案にあらざる乎

因州イナバの鳥取でしかも若櫻、智頭兩街道筋の擴張が企てられて居るが兩街道筋は大小商店が櫛比し目抜き繁華街である爲めにその實施は甚難事である、夫れで案出されたのが軒下道路である。在來の家屋は現在のまゝ動かさず店頭の裝飾窓や陳列棚を約三尺乃至六尺引こめて店舗の軒下に

鋪道をつくらうといふもので臺北市の如きはすでにこの軒下道路を作つてをり、殊に鳥取市の如く雨や雪が多い地方では軒下道路が出来ればお客さん達は少しも雨や雪に悩まされる心配がなく買物が出来るので、今までと違つて雨や雪の日も商店街は自然と繁昌請合ひだし路線擴張に要する經費もうんと軽減出来るので一石二鳥も三鳥もの妙案として早くも歓迎されて其の完成の日が期待されて居る、窮すれば達すとは此の如きものか。

全村杉の美材で無

税の樂土

日本海上はるかにうかぶ隱岐島の布施村では無税村へのゴールめざして輝かしい模範的林业のピッチが上げられてゐる、同村は山と海とに挟まれた人口わづか二百三十戸の僻村で地味瘦せ物産に乏しく島村第一の貧乏村であつたが、遠く享保年間に村の

先覺者藤野孫兵衛が伊勢参りの歸り路に吉野杉の種を持ち歸り造林によつて村勢の挽回を思ひ立ち大英斷をもつて畑地を潰しあるひは雜木林を伐り折いて杉を植栽したがその後村民はよく苦難の半世紀を耐へて男は舟乗り、女は漁師といふ風にもつぱら海に生計の道を求め、やがて五十年の後には全村鬱蒼たる杉の美林を育て上げたのであつた、明治三十七年に部落有林を完全に統一して村有林にまとめ上げ現在は杉七分に松三分を混へた天下の美林一千町歩を村有としその評價額百三十萬圓年々八千圓乃至九千圓の収益をあげてゐるといふ、之こそ眞の樂土である。口先ばかりの連中は企て及ぶことが出来ないことを今更ながら痛感する。

あるかなきかの珍

聞奇譚 (19)

○室町時代の五輪塔型路標 變形路標町

石と稱する室町時代の路標が発見された、此路標は奈良縣宇智郡宇性村大字三在川原辻の北寄り畦畔で青石の一石造り、高さ地下から約一丈の堂堂たるもの表面の種子は東方發心門塔身(水輪)の周廻三尺八寸基礎(地輪)に約六尺の脚を附し左たえず道と方向を教へてゐる。大體この路標は數奇な運命の持主で維新前後は約數町東方宇野峠麗月見寺にあつたものである。

○祝部式甕の完成品現はる、奈良縣磯城郡安倍村安部山で栗拾ひの兒童に依つて發見された古甕は口徑約九寸五分、深さ約一尺五寸ありまた出土地の安倍山は奈良朝時代の創建といはれる安倍寺址に近く附近から從來奈良、平安兩時代の遺瓦や祝部、十師器の十器など幾多出土し古代文化の匂ひ豊かであるが同地からこれだけ大きい完全なものが發掘されたのは今回が初めてで學界の注目をひいてゐる。

○千年前の鑄銅聖觀音、大阪府南河内郡

白木村に葛城山中腹の幽邃境に在る高貴寺は近代の大哲人慈雲尊者隱棲の地と云はれて居るが此慈雲尊者は徳川時代末年の享保三年に大阪中之島で生れ、後年は高貴寺に隠世して専ら梵學の研究に没頭し今日世界

的著述となつてゐる「梵學津梁」一千卷の大作も同寺でなされたもので發見された聖觀音菩薩像は高さ一尺一寸に對し重さは一貫二百三十匁もあり、豐頬な面貌といひ腰下に重心をおいて上身をやゝ後方にひいた

力強い構へ、左足を少し前方に踏み出してがつくりした安定感を備へたところなど全身のいひ知れぬ含蓄と迫力に富んでゐるのからみて貞觀時代佛像の明らかな特徴を持つてゐる。

秋季雜題

初 聲

巴 藤

酒の味秋めく夜々となりけり
カンテラを煽る夜風や村芝居
樂燒にひねもす晴れぬ楳柞
盗み酒秋刀魚の腸を嗜むなり
水ありと覺ゆ雁落つ芒かな
狐鼠覗いて去んぬ花すゝき
肌寒や乳のませ居る縁日か
大いなる蟠螂ベサと灯の障子
蟲送る雛子たへく丘起伏
川尻を覆ふ海月や望の汐

秋晴れや大岩壁に腰かけて
よぢ登る岩冷えくと村紅葉
山嶺やコスモスの蔭に梨喰ふ
秋雨の利根の渡りに惱あり
芋の葉の何に動かカリ根の雨
鯊釣や不漁の煙草盡しける
配繩といづれ鯊つる人淋し
登り道いづれとまどふ草紅葉
村童に道問へば只笑ひけり
寺跡など墓などわびし曼珠沙華
花藜や谷水に浸たす掌